

# 学生スポーツ選手の競技引退に関する一考察

— コロナ禍によって競技会が中止された事例 —

山口 柚 実 国立病院機構  
高橋 豪 仁 奈良教育大学保健体育講座 (体育学)

## Considerations of the Retirement of Student Athletes : A Case Study of Student Athletes whose Games were Canceled Due to COVID-19

YAMAGUCHI Yumi

(National Hospital Organization)

TAKAHASHI Hidesato

(Department of Health and Sports Science Education, Nara University of Education)

### Abstract

The purpose of this study is to clarify how unexpectedly canceled games because of the COVID-19 peril influenced the student athletes who intended to participate in the game as the last one of their university athletic life (= the retirement game), and how they adapted their lives after the athletic retirement to career transition, from the view point of adaptation to career transition and sport socialization.

They regarded their senior players who had experienced the retirement games till the previous year as the ideal role model, and wanted to accept their athletic retirement after participating in the retirement games which are needed for smooth retirement because the game is to be a clear goal of their university athletic career. The retirement games have a function of de-socialization from the athletic career. Those who anticipated the cancellation of retirement games and had a vision of their lives after athletic retirement, were able to adapt their lives to the career transition. The difficulty of de-trans socialization was seen in one student who continued to take part in practicing sports after athletic retirement.

キーワード：競技引退, 大学生,  
新型コロナウイルス感染症

Key Words: athletic retirement, undergraduate,  
the COVID-19 infection

### 1. はじめに

#### 1.1. 問題の所在

スポーツ選手として勝利や記録を目指して現役で行う競技活動から退くことを意味する「競技引退」は、どのようなレベルのアスリートであっても、いずれ必ず直面しなければならない発達課題である (豊田, 2011)。このようにスポーツ選手にとって競技引退は不可避の出来事であり、「競技者である自分」から「競技者でない自分」への移行により、今までの日常から精神的にも身体的に

も大きな変容をもたらす1つの大きなライフイベントとして捉えることができる。選手生活からの引退・離脱は、本人にとって苦痛を伴うものであることが多い。

プロ選手の場合は、第2の人生を非競技者として送ることとなるので、引退後のキャリアの問題や、アイデンティティの動揺が生じることとなるが、高校生や大学生の競技引退は卒業時の転移に伴うものであるため、それほど深刻なものとならない。しかしながら、2020年は新型コロナウイルス感染症が日本においても流行し (以下「コロナ禍」と表記する)、スポーツ界に大会の中止や延

期、無観客試合など様々な影響もたらされ、また、学校運動部活動にも練習の制限や停止などの影響があった。その1つとして、大会の中止等により予定していた形とは違い、締めくくりの場や成果を披露する場、つまり競技引退を伴う大会（以下「引退試合」と表記する）がないまま競技引退を迎えることを、学生たちは余儀なくされた。こうした学生は、自らの競技引退をどのように受けとめたのであろうか。

## 1.2. 競技引退に関する先行研究の検討

### 1.2.1. 移行に対する適応

1980年代初頭までの欧米のスポーツ社会学において、スポーツ競技からの引退を捉えるモデルとして、社会老年学理論が用いられていた（中込，2000）。これは、スポーツからの引退を労働力の引退過程と見なし、経済的活動を行わない人へとその地位を移動することを意味し、競技引退をネガティブに捉えるものであった。

こうした社会老年学理論に対して、コークリー（Coakley, 1983）は、引退の過程は社会構造的な内容に基づくダイナミックなものであり、ジェンダー、人種、年齢、社会経済的な地位、社会的・情緒的な支援のネットワークなどの要因が、スポーツからの移行（transition）の在り方を形成していると論じている。彼は、アスリートにとって引退が必ずしも心的外傷やアイデンティティ危機などの深刻な問題とはならないとし、競技引退を一つの「キャリア終結（career termination）」というよりも新たな人生への「再生（rebirth）」と捉えるべきであると主張し、「競技引退（athletic retirement）」を「スポーツ競技への活発な参与から、他の活動へ移行するプロセス」と定義づけた。豊田・中込（2000）も同様に、引退後の社会生活への適応プロセスは、新たな「自分づくり」を果たす過程であり、競技引退は相反する可能性を持ち、競技引退後の人生を歩む上で大きな意味を持つと言う。つまり、こうした研究はスポーツ選手が移行によって直面する新しい状況に対して如何に適応するかという観点に立つものである。

移行に対する適応には様々な要因が関与しているという立場から、日本において、下記のような研究がなされている。

大場・徳永（1999）は、競技引退は競技スポーツへの関与レベルや競技引退の生起状況、そのアスリートにとっての競技引退の意味等、様々な要因から影響を受けていると述べている。そのため、どのように競技引退を経験したかにより、競技引退がポジティブ（肯定的）なものにも、ネガティブ（否定的）なものにもなる可能性がある。

中須賀ほか（2019）は、競技引退後にスポーツとの乖

離を促す深刻な心的外傷へと発展するネガティブな状態に陥る者もいれば、一方で自己探求や人間的成長またはその変化を促進するといったポジティブな反応を示す者もいると述べている。また、競技引退後の反応をポジティブなものにできるか否かは、選手がどのように競技から引退することができたのかという「質」に由来していると述べている。つまり、個々のアスリートによって競技引退の持つ意味合いが異なり、競技引退の重要性や影響に差異が生じるということである。その結果、競技引退後の社会生活に対して不適応を起こしていたり、心的外傷体験となったりしている事例も存在する。

豊田・中込（1996）は、引退を迎える前に引退後の生活に向けての具体的な準備を行い、引退に対して積極的な姿勢で臨む人にとって、競技者から競技者でない自分への移行は比較的容易であり、競技引退を突然迎え十分な時間をかけての移行でないと引退後の生活において不適応を呈していると述べている。また、大場・徳永（2000）は、自らの競技人生への誇りと満足感は、競技引退に伴う影響やストレスに緩衝作用をもたらすものであると述べている。これらより、競技引退について競技期から見通しを持ち準備をすることと、競技期に対して満足感や達成感を持って競技引退を迎えることが、競技引退後の生活にとって重要であることが分かる。

### 1.2.2. 社会化，超社会化 → 脱社会化，脱超社会化 → 再社会化，再超社会化

競技引退について包摂的な研究を体系的に進めていくために、吉田（1999）は「社会化」の視点を示している。スポーツ社会学における従来の社会化論では、人間がどのようにしてスポーツの世界に足を踏み入れ、如何にしてスポーツ的役割を取得するのかという「スポーツへの社会化」とスポーツに関与することによって、どんな人間が形成され、その結果、集団や社会に対してどんな影響を与えるかという「スポーツによる社会化」の2つの側面があるが、競技引退は選手から一般人への「逆の社会化」なので、従来のスポーツ的社会化の枠組みでは捉えられない。逆方向への社会化過程のダイナミズムの分析の重要性を吉田は指摘している。

亀山（2011）は、「超社会化」の概念を用いて、どうしてスポーツ選手は引退することが困難なのかを、プロ野球選手のイチローや榎本喜八らを例にあげて論じている。社会化は、集団が新しい成員を補給することで、その集団を維持する作用を果たし、当該集団のウチとソトという区別があり、個人と集団の両方を外部の圧力から防衛する働きを有しており、ベルクソン（1979）の言う「閉じた社会」においてなされる。それに対して、超社会化は、「開いた社会」においてなされ、ウチとソトとを区別する境界の存在しない集団への社会化である。そ

これは行為において主体と対象が相互に浸透する経験となる。スポーツの領域では、こうした経験が生じることはめずらしくないと亀山は言う。そして、そうした経験は、身体と外界とを区別する境界が溶解し、ウチとソトとが相互に浸透しあうことによって生じるものである。それは、チクセントミハイ（2000）の言うフロー体験に相当するものであり、体験者にこの上ない喜びを与える。そのため、スポーツ選手はこの経験を忘れることができずに、その経験を求めて、スポーツを継続するのである。

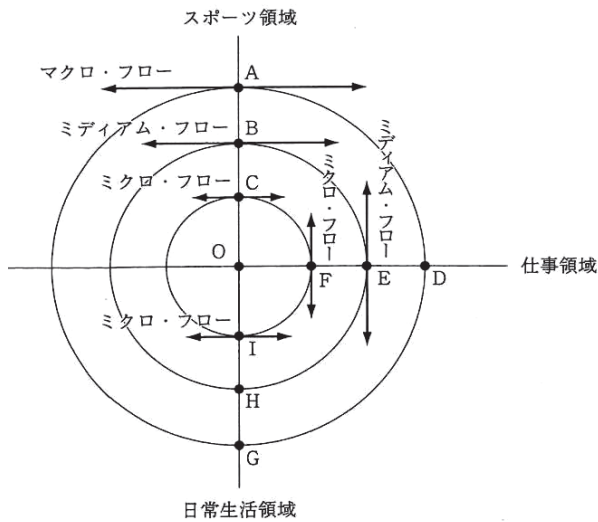


図1. スポーツ・仕事・日常生活に見る社会化と超社会化 (亀山, 2011, 187頁)

亀山は、社会化と超社会化を、図1を用いて説明している。Oは主体が位置する場所であり、社会化がゼロの地点となる。OからC→B→Aと社会化が進む。例えば、Cが中学での野球、Bが高校での野球、Aがプロ野球となる。そして、各カテゴリーにおいて役割（技術や価値観）を習得していく。C, B, Aに接する接線が、超社会化の軸に相当している。それは各段階で生じるフローの大きさを示しており、技量が高まるにつれてフローは深いものになり、超社会化も進展する。これが、社会化・超社会化の過程である。

やがて、身体的な衰え等の挫折体験によって、A→B→C→Oと移行する。これが脱社会化・脱超社会化となる。また、A地点で深いフローを経験した者は、その歓喜を忘れることができず、選手から指導者に役割を変えて、究極のフローを追い求めることとなる。これが、再社会化・再超社会化となる。スポーツほどではないが、仕事領域や日常生活領域においてもフローを体験する。

この枠組みを使って、小丸（2010）は日本野球独立リーグでプレイした経験のある選手たちを対象に事例分析を行った。小丸は引退過程を大きく2つに分けている。1つは、理念通りに事が運ぶ「順路型」で、A→B→C

→Oと移行する。もう1つは、理念通りに事が運ばない、怪我などのために不本意に引退する「ショートカット型」であり、例えばAからB, Cを迂回してFに移行する。

脱超社会化を導く経験は、挫折体験であり、その体験は「引き際を悟った」「腑に落ちた」などと表現され、この体験がない場合は超社会化の影響から脱することが困難となる。この「腑に落ちた」と表現される経験によって「順路型」の引退過程になるとして、小丸は事例分析した。

## 2. 研究の目的と方法

### 2.1. 本研究の目的

スポーツ選手が競技引退を行う要因やタイミングは多様であるが、大場・徳永（2000）が日本のアスリートの引退原因は、競技力の低下、環境の不備、ケガ・病気、大学卒業・就職、気力の衰えなどと述べている。また、学生アスリートにとって競技引退は進学や就職といった通常の役割移行と関係があり、多くの場合、それらと同時に生じると述べている。よって、学生スポーツ選手は大学卒業や就職時に競技者としてのキャリアを終えることが多い。また、大学卒業や就職時は運動部活動として競技に関わることが終了し、引退時期が予期できたり、セカンドキャリアの検討、準備ができたため、競技引退後の生活に適応しやすいと考えられる。

しかしながら、2000年度は大学運動部活動においてコロナ禍の影響で、競技引退を予期していたのにも拘わらず、予期していたものとは異なる形で競技引退を迎えるケースが発生した。つまり、本来、競技引退後のより良い適応をもたらすことができると考えられている大学卒業時での競技引退がネガティブなものとなってしまった可能性が考えられる。

そこで本研究では、大学運動部活動に所属し、本来競技引退を伴う予定であった大会が中止になったことで、予期していたものとは異なる形で競技引退をした人を対象に、アンケート調査とインタビュー調査を行い、予期していた競技引退の形とは異なる競技引退を迎えたことが競技引退及び、その後の生活に与えた影響について明らかにすることを目的とする。また、引退試合や競技引退時期の予期の必要性についても明らかにする。

なお、本研究は、前節で示したように、移行に対する適応の観点と、社会化の観点で、スポーツ選手の競技引退を検討する。

### 2.2. 調査対象

本来、引退試合を予定していた大会が中止になったことにより、予期していたものとは異なる形で大学運動部活

動を競技引退したX大学に在籍するAさん、Bさん、Cさん、Y大学に在籍するDさん、Eさんの競技者5名を対象とした。5名とも最終学年である4年生であった。なお、対象者には、事前に本研究の趣旨及び内容を説明し、調査への協力、匿名での成果発表に同意を得た。また、対象者の発言によって個人が特定されないように配慮した。回答者一覧を表1に示す。

表1. 回答者

回答者	性別	競技種目	調査時における引退後経過期間
Aさん	男	ベースボール型種目	8か月
Bさん	女	ネット型団体種目	7か月
Cさん	女	ネット型団体種目	7か月
Dさん	女	ゴール型団体種目	5か月
Eさん	女	ゴール型団体種目	5か月

### 2.3. 調査時期, 実施方法

2020年12月中旬を調査期間とした。実施方法は、Aさん、Bさん、Cさんは対面で行い、Dさん、EさんはZoomを使いオンラインで実施した。

選択・自由記述式アンケートとインタビュー調査を実施した。アンケート用紙は事前に配布し記入してもらい、インタビュー調査の前に回収し、記入内容を基に半構造化インタビュー調査を行った。インタビューの所要時間は、1回につき1人あたり60分-90分で、面接を1-2回実施した。回答内容は全て著者が筆記により記録すると共に、録音の許可を得た上でインタビューの録音を行った。

## 2.4. 調査方法

### 2.4.1. アンケート調査

質問項目は、豊田・中込(1996)が競技経験を持つ競技者が競技引退を迎え、その後の生活への適応を果たすプロセスを提示する際に作成した面接マニュアルを参考にした。これを基に、基本的属性、大学運動部活動中、競技引退、競技引退後についてそれぞれ質問項目を作成した。

### 2.4.2. インタビュー調査

アンケートの記入内容を基に、時間的経過に考慮しながら、体験したエピソードやその時の感情や受け止め方、競技引退に際しての諸事情を具体的に聴き取った。特に、本来の競技引退の仕方やイメージと、コロナ禍で大会等の中止に伴って生じた競技引退の仕方や感じたことについて話してもらった。

## 3. 競技経歴と競技引退の過程

### [Aさん]

11歳から当該種目を始め、中学校、高等学校、大学と部活動として当該種目を継続してきた。

本来であれば、大学4年生の6月頃に開催される春季リーグ戦に出場し競技引退を行う予定であった。しかし、コロナ禍の影響で4月から練習が停止になり、春季リーグ戦も中止になった。その結果、リーグ戦の中止が発表された4月に競技引退を自然と迎えた。また、競技引退をしたものの、9月頃に開催される秋季リーグ戦に少しでも出ようと考え、そのために個人的に練習を行った。しかし、秋季リーグ戦は開催されたが大学側から出場の許可が出なかったため、出場できなかった。結果、公式戦に出場せず区切りのないまま競技引退を迎えた。

### [Bさん]

中学校から部活動として当該種目を始め、高等学校、大学と部活動として当該種目を継続してきた。

本来であれば、大学4年生の4-5月頃に開催される春季リーグ戦に出場し競技引退を行う予定であった。しかし、コロナ禍の影響で3月31日から練習が停止になり、さらに4月中旬にリーグ戦の中止が発表された。その結果、幹部と下級生のみで5月に代替わりのミーティングを行い、これに参加し競技引退を迎えた。また、9-10月頃に秋季リーグ戦が開催され出場することもできたが、就職試験があることや部の幹部学生が代替わりをしていることなどから出場はしなかった。

### [Cさん]

中学校と高等学校では吹奏楽部に所属し、大学から未経験の当該種目を始め、部活動として競技を行った。

本来であれば、大学4年生の4-5月頃に開催される春季リーグ戦に出場し競技引退を行う予定であった。しかし、コロナ禍の影響で3月31日から練習が停止になり、さらに4月中旬にリーグ戦の中止が発表された。その結果、幹部と下級生のみで5月に代替わりのミーティングを行い、競技引退を迎えた。しかし、幹部ではないためにこのミーティングには参加できず、区切りとなるものがないまま競技引退を迎えた。また、9-10月頃に秋季リーグ戦が開催され出場することもできたが、部活動ではないことに時間を使いたかったことや既に気持ちが切れていることから出場はしなかった。

### [Dさん]

幼稚園に通っている時に地域のチームで当該種目を始め、小学生、中学生とそのチームで活動し、高等学校、大学では部活動として当該種目に取り組んだ。

本来であれば、大学4年生の4-5月に開催される春季リーグ戦に出場し、さらに9-10月頃に開催される秋季リーグ戦にも出場し競技引退を行う予定であった。し

かし、コロナ禍の影響で春季リーグ戦が中止になり、7月に秋季リーグ戦の中止も発表された。試合がない中で10月まで続けるには、モチベーションが続かず、7月以降に就職試験もあったため、7月末で競技引退をすることを決意した。それに伴い、後輩の提案で7月の中旬にユニフォームを着て練習試合を行った。しかし、この試合を目指して練習をしてきた訳ではなかったこの試合を最後に引退するのではなく、7月末まで練習を続け、7月末の練習を最後に、競技引退を迎えた。

#### [Eさん]

中学校と高等学校では陸上部に所属し、大学から未経験の当該種目を始め、部活動として競技を行った。

Dさんと同じクラブに所属しており、同様の経過を辿り、7月中旬の練習試合に出場し、後述するようにDさんとは練習参加の理由は異なるが、7月末まで練習に参加して、引退した。

### 4. 引退試合中止の影響

#### 4.1. 引退試合の中止が決定した時の心境

引退試合の中止が決定した時の心境は以下の通りである。まず、Aさんはリーグ戦のために練習してきた時間が台無しになったと思った。他大学がコロナウイルスの影響で練習ができていない中、まだ練習ができていたことから、今回は2部に昇格するチャンスだと思い、いつも以上に力を入れて練習に取り組んでいた。そのため、「今まで頑張っていた時間は何だったのだろう」と思ってしまった。大会に向けて練習してきた分、やるせない思いに駆られていた。同様に、Bさんは最終目標を達成できなかったことに対する悔しさを感じていたり、Dさんは目標としていた大会がなくなりモチベーションがなくなったりした。また、Eさんは大会があると思い、心の準備をしていなかったのが信じられなかったという。これらのように、大会に向けて練習に取り組み、目標を掲げていた分、状況を受け入れられず、虚脱感が見受けられた。また、大会の中止を予期できていなかったこともこのような感情に陥った要因であると考えられる。

一方、Bさんにはほっとした自分も存在し、この気持ちの方が大きかった。コロナウイルスが怖かったことと、前回のリーグ戦の期間中、部の雰囲気悪さや部員のことを気遣いながら自分のこともやらないといけなことから、しんどい経験をしたことで、もう一度それが来るのかと思うと身構えていた自分がいたからだ。またCさんも同じく、良かったと思った。自分のミスで試合に負けて引退となったら怖い気持ちや、まだそこまで技術を身に付けられている自信がなかったことから、春リーグ戦が来てほしくない気持ちと試合に出て自分の力

を試したい気持ちの間で葛藤していたからだ。両者共に、大会に対する不安を抱えていたが、大会が中止になりその不安から解放され安堵した。大会の中止が両者の助けとなり肯定的に働いたと考えられる。

さらに、Cさんは試合があると想定していたにも関わらずなかった場合、気持ちの落差が激しいため、前もって試合がなくなるかもしれないと薄々思い心構えをしていたことがすぐに適応できた要因だという。ここからも大会の中止を予期できたか否かがその後の反応に影響を与えると考えられる。

以上のことから、競技引退を伴う大会の中止が分かった際は、競技期に抱いていた思いからプラスにもマイナスにも捉えられることが明らかになった。大会に不安を抱えている場合はプラスに働き、大会や目標に対する思いが強い場合はマイナスに働く。また、豊田・中込(1996)の先行研究において、競技引退が本意にも予期せずもたらされた場合、競技引退がネガティブなものになる可能性が高いとあるが、引退試合の大会の中止が予期せずもたらされた場合にも同様のことが言える。

#### 4.2. 競技引退時から現在(調査時)までの心境

競技引退をした時から調査を実施した時までの間に、自身の競技引退に対してどのように感じ、何を思ったのかを話してもらった。

まず、5名ともに共通していたことは、コロナ禍の影響で大会が中止になったことは自分自身も関係者も悪くなく、不可抗力であることから受け入れることができ、仕方ないと思っていた。しかし、これを踏まえた上で、試合をしたかったという思いも共通していた。BさんとCさんは、大会がなくなった時はほっとしていたが、時が経ち、他の部活動が試合をして競技引退をしている姿を見ると、Bさんは羨ましく思ったり、Cさんは消化不良で終わったと感じたりし、試合をしたかった思いが表れてきた。不安から解放され、もう一度自分自身の競技引退について考え直すと、引退試合に対する思いがあることを自覚した。

Eさんは目標に挑戦することすらできなかったことから、やり切れず試合をしたかったという気持ちがあった。DさんとEさんは自分自身が最高学年で公式戦を一度も行わずに競技引退を迎えている。例年以上に意識を高く持ち、目標と大会のために練習に取り組んできたからこそ、練習試合を最後にできたものの、リーグ戦をしたかった思いがあった。

また、引退試合をしたかったという残念な気持ち以外にもそれぞれ思いがあった。まず、Aさんは大会がなくなり区切りが付かなかったことで社会人でも続けようと思った。本来、社会人では続けようと思っていたが、「あやふやなまま〇〇(当該種目)を終わらせたく

なくて、自分にとって良いイメージでないと終われない」ために考えが変化した。社会人でも〇〇(当該種目)を続けていたら、何か成功して区切りとなるきっかけがあり終わることができると思ったためだ。競技引退を迎えるにあたり、競技に対する満足感や区切りになるものがあることが、進退を決断する際の材料になることをAさんの語りは示している。

次に、Bさんは先輩が競技引退をする際のやり切った姿がかっこよく憧れていたこともあり、引退試合をして競技引退をした先輩方のことを羨ましく思っていた。Eさんも同様で、先輩の最後の試合には色んな人が応援に来て、負けても笑顔で終わっている姿を見て自分もそのイメージをしていたが、そのような引退試合を経験できなかったのが悲しい気持ちになったという。このように、先輩がロールモデルであり、それを理想として自分自身の競技引退もイメージしていた。理想と現実の差がこのような感情を生じさせた。

一方、Cさんは上記で述べたように試合をしたかった気持ちもあった反面、部活動のない生活が始まるのが楽しみだった。友人が部活動に入らず大学生活を楽しんでいる姿に憧れ、「ずっと部活をやってきたから、残り自分のために時間を使おう」と競技期から部活動のない生活が早くしたく楽しみだったからだ。豊田・中込(1996)が競技期に漠然とでも自己の将来を見通していることが、競技引退後の生活への移行において大きく役立つと述べている。この事例においても、同様のことが言える。

以上のことから、試合ができなかったことに対して了解しているものの、先輩の引退をモデルケースとして、引退試合を実施してから引退したいという思いがあったことがわかる。この思いは引退試合が中止と分かった際の感情の起伏がある状態よりも、ある程度日数が経ち自分自身を対象化し、競技生活を振り返ったり、今後について考えることができるようになったりした時に生まれた。つまり、図1において、対象者の5人はそれぞれ、そのスポーツの社会化のレベルに応じてAあるいはBあるいはCの地点に位置していたが、引退試合の喪失によって、スムーズにO地点へと脱社会化することができなかったのである。

また、Aさんと同様に、区切りがなかったことがEさんにも影響していることを次節で記すが、引退試合という区切りの有無が競技引退に影響を及ぼすのである。さらに、競技引退の形には先輩の存在が関係していて、先輩の姿に憧れ、自分自身の競技引退へのイメージを持つことが分かった。一方、Cさんの事例からは競技期から競技引退後の生活へのイメージを抱いておくことの重要性が示唆される。

#### 4.3. 達成感、満足感と競技引退

永谷(1998)が競技スポーツ集団において複数人が集まり活動していくためには、目標を設定することが非常に重要であると述べている。今回の5つの事例においても、個人目標とチーム目標が設定されていた。その目標は全て最終的に大会を行い、その成績や内容によって達成できたかどうか決定されるものであった。例えば、Cさんの個人目標は試合に出て得点することで、チーム目標は6部に昇格することというようなものである。そのため、練習はその目標を達成させるための過程であり、大会がなければ実行し挑戦することができない。ところが、今回の5人の事例では引退試合の中止により、その大会に向けて掲げていた個人やチームの目標は達成する機会もなく、競技引退をするようになった。

目標を達成できなかったことにより、競技に対する未練が残っている。Aさんは試合があれば達成できていたのではないかと、Bさんは目標に対して納得ができていない、Dさんは目標を達成させたかったという思いから未練が生まれている。

競技生活への満足感を対象者に尋ねた。Aさんは競技期に達成できた目標は何個もあり、「今までの過程は間違っていなかった」と思うが、目標が達成できなかったことにより満足感は70%であった。Bさんは人との出会いや部活動の経験からこの部活動に入って良かったと思う気持ちもあるが、試合ができず目標も達成できなかったことにより満足感は65%であった。競技生活において目標を達成することが全てではないため、満足感を何らかの活動から得ることはできているが、両者とも、試合をして目標が達成できていたら、100%であったという。永谷(1998)が目標の達成へ向けた意欲的な活動によってもたらされる結果からは大きな達成感や満足感を得ると述べているように、目標の達成がもたらす満足感は大きく、AさんとBさんの事例からもそれは明らかである。

また、引退試合がなかったことが競技生活の満足度を下げている。Dさんは「試合以外の部分は満点」だから「100%と言いたい」が、「なんのために練習をしてきたのかと考えたら試合のためだから」、試合がなくなったことはマイナスになった。満足感は90%であった。Eさんも練習試合はできたので0%ではないが、試合でやりたかったことはあまりできず未練があることにより満足度は50%ぐらいだと言った。DさんとEさんはAさんとBさんと違い、試合ができれば目標を達成できていなくても、出し切ったと思うから100%と言えたと思うという。試合に出てもすべての選手が目標を達成できるわけではないので、目標が達成できない場合も十分考えられる。川谷(2013)が練習は試合があって初めて完結し、練習自体では自己完結できないと述べているように、試

合は日々の練習の成果を発揮する場である。実力を発揮し目標を達成できたか否かの前に、この試合という場がなかったことが、満足感に影響をし、満たされなかった要因となっていた。

一方、Cさんは目標が達成できなかったことに対しては悔しさを見せ、もっと上達したかったことや試合で自分自身の能力を確認し自信を持ちたかったことから達成感がなく競技に対する未練が残っていた。しかし、競技生活に対する満足度は100%であった。高校までは吹奏楽部で、大学に入って初めてスポーツの場に飛び込み、試合はなかったが、一応最後まで続けられ、色々な人と出会うことができたからだ。また、自分を知る経験や自らチームを動かす経験をしたことで部活動をやって良かったと思えているからだ。今回の競技引退の迎え方に対してマイナスの影響を受けているが、引退試合がなかったことを踏まえた上でも、競技生活の他の部分から満足感を十分に見出していた。

これらから、大会の中止により、目標に挑戦することすらできず、目標を達成することができなかったことで競技に対する未練が残り、競技生活に対しての満足感を満たさない要因となっていた。しかし、Cさんのように、試合や目標に対しての思いがあっても、他の部分から満足感を満たすことができる場合もある。

前述したように、大場・徳永(1999, 2000)は、競技期に対して満足感や達成感を持ち競技引退を迎えると、競技引退に伴う影響やストレスに緩衝作用をもたらす一方、目標が達成されず引退を迎えると競技に対する未練が強く競技引退がネガティブなものになる可能性が高いと述べた。ここから、Aさん、Bさん、Eさん、Dさんは競技に対しての満足感を満たしていなかったり、あるいは目標が達成できず未練が残っていたりしていることから、競技引退後の生活に適応しにくい状況にあったことが推察される。Cさんは、満足感が100%であったが、目標を達成できず未練があるので、適応、あるいは不適応のどちらの場合も考えられる。

## 5. 移行に対する適応

### 5.1. 競技引退後の状況への適応

Aさんは大会が中止と発表され競技引退をした時は落ち込み、ただらした時期があった。目標を掲げその達成のために練習を行ってきたが、試合も目標もなくなり頑張る理由がなくなったためだ。しかし、並行して行っていた就職活動には影響はなくいつも通り取り組めたという。その後、出場する予定ではなかった秋季リーグ戦に出ようと決意し個人練習を始めたことにより、新たな目標を持って生活に適応することができた。

一方、Aさん以外の4名は競技引退後の生活にすぐに

適応でき、特に否定的な影響がなかった。Bさんは就職試験の時期であったことや、「自分の中で一番大きく占めていた部活動のことを考えなくて良くなった」ことから、時間がとてもでき勉強に集中することができた。また、Cさんもすぐに就職試験の勉強をしないといけないと思い、ただらしないために1日にやらないといけないことを書き出すなど自分なりの工夫をした。競技引退の時期と就職試験の時期が重なっていたこともあり、すぐに部活動以外のことで移行する対象があったことが競技引退後の適応に良い影響を与えていると言える。

また、DさんとEさんの場合は、競技期から部活動と就職試験の勉強を両立していたことから、影響はなく、勉強が疎かになることもなかった。また、Dさんは勉強の時間が増えたことを、Eさんは部活動のことを気にせず実習や就職試験の準備に挑めることをプラスに捉えていた。競技引退後に部活動に代わるものを競技期から有していることが、競技引退の生活にうまく対処することに繋がっていた。

前節で、引退試合の中止により、Bさん、Dさん、Eさんは引退後の生活に適応しにくいのではないかと述べた。しかし今回の事例より、目標が達成できず未練が残っていたり、競技に対して満足感を満たしていなかったりした場合であっても、部活動に代わる対象が競技期から存在することによって、競技引退後の生活にうまく適応することができていた<sup>(1)</sup>。つまり、突如として発生したコロナ禍という不可抗力により大会が中止になったことを受け入れ、強かに現状に対応できた。豊田・中込(1996)は競技者が競技引退後の社会生活への適応を果たすには、競技に代わる対象を見出すことが関わっていると述べている。本事例の競技引退後の生活において、達成感や満足感がない競技引退であったとしても、競技に代わる対象の存在がストレスを和らげていた。先行研究の検討において紹介した小丸(2010)のモデルにあてはめるなら、引退試合の中止による不本意な引退であったとしても、巧く引退後の生活に適応した「ショートカット型」の引退であったと言える。

### 5.2. 競技引退後の練習参加

競技引退後、インタビュー調査を実施した2020年12月において、Aさん、Dさん、Eさんは、練習に参加していた。Aさんは、予定が合えば部活動の練習に参加しているが、「目標が達成していたら練習に参加していない」と語った。「大学の部活は自分のためにやっていて、自分の目標に向かって頑張りその結果が出たら、その結果そのものがこのぐらい頑張ればこういう結果が出ますとチームに残せると思っていた」。しかし、その結果がないため、今までの経験や大学生活で得た考えを下級生に伝え、自分の信念を残しに練習に行っていると言う。

また、Eさんは、競技引退をした現在も部活動に参加しているが、試合をしてきっぱり競技引退をしていたら、後輩の人数が少なくても部活動に行っていないし、行ったとしても遊びに行くイメージだった。しかし、区切りがなく競技引退したことで競技に対して未練があるため、現在（インタビュー時）も部活動のために予定を空けている。それは、OGとして遊びに行く気持ちよりも、現役選手と同じ部員の1人として部活動に行っている。また、後輩の人数が少なく練習試合に現在も出場している。個人の目標をチームに貢献するために掲げていたが達成できなかったので、練習試合に出て得点をしてチームに貢献することで達成させようと思ひ、そのために練習に参加している。

Dさんは試合がなかったことで、競技期から競技引退後も当該種目をしたと考えていた思いが強くなった。しかし、競技に対して未練があり、本来の競技引退ができなかったことには影響をあまり受けていない。現在も部活動の練習に参加し競技と関わっているが、「1番に〇〇（当該種目）が楽しい」というのがあるからであり、未練の解消を目的に参加していない。

AさんとEさんは、引退試合をしていたら、練習に参加することはなかったと言っている。2人とも部のために、つまりAさんは下級生にメッセージを伝えるために、Eさんはチームに少しでも貢献するために練習に参加している。引退試合がスムーズな脱社会化をもたらしていると前述したが、この事例は、部のためにという「閉じた社会」において、引退試合の中止という不本意な引退が、脱社会化を妨げていることを示している。それはあくまでも「脱社会化」であり、「脱超社会化」ではない。それに対して、Dさんが練習に参加しているのは、「楽しいから」であり、幼少期より当該種目に取り組み、フロー体験の喜びに裏付けられた超社会化ゆえに、脱超社会化できないのであろう。

## 6. 引退試合と競技引退の予期の必要性

### 6.1. 引退試合の必要性

5人に引退試合の必要性を問うと、各人から必要であるという返答を得た。必要とする理由について、AさんとDさんの場合、競技引退を伴う大会は目標となるため必要であると考えている。Aさんは「目標に向かって頑張る過程が大事なので、その目標がなく、うやむやに終わって行くのであれば、部活をやる意味がないと思う」と、大会における最終目標は、その実現に向けて部活動を行う動機付けになっていたと言える。また、Dさんは大会の必要性は、「そのチームが何を目標にしてやっているかで変わってくる。楽しくやろうと思っているチームなら、試合はなくても練習が楽しかったら良い」。し

かし、Dさんのチームは大会のために目標を立て、そこに向けて練習を行っていたので引退試合は必要だった。その必要性は各チームによって異なると述べるも、Dさんのチームでは集団として大会に意識を向けて練習を行っていた。これらより、チーム、個人として目標を持つ上で、引退試合は必要であり、練習を行う目的となる。また、これによりチーム、個人にとって目標が明確になり、やる気が高まるのである。

次に、BさんとEさんの場合、引退試合は「区切り」として必要であると考えている。Bさんは「試合ではなかったらどのように区切りを付けるかが分からない」。Eさんは「綺麗な形で終わる」ためには1つのタイミングが必要であるという。このように、部活動を行っている学生にとって大会という場が競技引退を行う上で、分かり易く区切りを付ける機会となると言える。

さらに、Cさんの場合、大会は、「1年間チームでやってきたことを全員で最後に出し切る所」で、「チームとしてどう変化したかを見られる場」であり、大学に入学してから当該種目を始めたこともあり、ゼロから始めて最後まで続けてどのぐらいできるようになったかを見られる場であるという。川谷（2013）も練習の目的は強くなることであり、この目的を果たしたかを判明したり、自他の強さを知ったりするためには試合の場をおいてほかにないと述べている。

以上のように、引退試合は部活動をする上で1つの明確な目標や区切りになったり、競技生活の集大成の場として成果を明瞭化させたりできるため必要であると、調査対象者は口をそろえた。練習に対する動機付けや競技引退をスムーズに迎えるためには大会や試合という目標や区切りとなるものの存在は大きい。一方、Dさんが述べたように、必要性はチームにより異なることも考えられる。しかし、川谷（2013）が練習は試合があって初めて完結し、練習自体では自己完結できないと言うように、大会に向け練習を行い、競技志向が少しでもあるチームであれば、引退試合はチームにおいて重要なものとして位置づけられる。

### 6.2. 競技引退時期の予期の必要性

本事例のような大学運動部活動では、引退試合が決められ、競技引退時期を予期できていた。しかし、大会の中止という予期していなかった出来事が起きたことにより、予期していた形とは違うタイミングや形で区切りのないまま競技引退することになった。これによる影響は前述した通りである。そこで、競技引退時期を予期できる、つまり、引退試合の日程が決まっていることの必要性について対象者に質問した。

Bさん、Cさん、Eさんは、予期できる方が練習における目標や計画が立てやすいため必要であると考えてい



る。Bさんは「目標の立て方も変わるし、モチベーションを保つため」にも、残りの時間を「楽しもうと思う」ためにも必要だと言う。Cさんは「お尻が決まることで1回1回の練習の密度が濃く」なり、最終目標の達成に向け「チームとしても、個人としても、小さい目標を立て」、それを達成する繰り返しができると言う。また、Eさんは決まった時期にある方が大会に向けて練習の計画が立てられるので理想的であると言う。これらより、目標や計画を設定する際にはより具体的な期限が有効であり、その期限に合わせて最終目標や計画を設定し練習の質を向上させられるため、競技引退の予期は必要であると考えられる。

また、Dさんは、競技引退に向けた準備期間を設定することで残りの練習をより丁寧に取り組み、やり残しがないように少しでも努力ができるからだ。これにより、「より綺麗」で「自分の納得のいく形」で終わることができる。不完全で終わらないために、自分自身で競技引退に向けて努力したいという思いが強く感じられた。

以上の結果から、学生たちは、まず、卒業に向けて競技引退を想定し、引退試合と最終目標を定める。これにより、競技引退までの期間が明確になり準備期間ができ、この期間における目標や計画を立て、大会に向けて練習の質をさらに向上させることができる。そして、納得のいく競技引退を迎えるために努力することができる。そのため、競技引退を予期できることは競技期の練習への取り組みにプラスの影響を与え、さらに競技引退を満足して迎えられるので必要であることが明らかになった。Dさんの言葉を借りるなら、引退試合は「綺麗に終わる」ための舞台装置となり、脱社会化を可能にしてゼロ（図1の中心）に戻る儀礼の機能を果たしているのである。

## 7. おわりに

本研究では、競技引退を伴う予定であった大会がコロナ禍の影響で中止になったことにより、予期していた競技引退の仕方と異なった形で競技引退を迎えたことが、学生スポーツ選手の競技引退に与えた影響、及びそうした学生たちが競技引退後の生活に如何に適應しているのかを検討した。

大会の中止が分かった際は、思わぬ出来事であったために感情的になり、また競技期に抱いていた思いから、学生によって大会の中止をプラスにもマイナスにも捉えていた。大会に対して不安を抱えている場合は、不安から解放され安堵した者もあり、大会や目標に対する思いが強い場合は、試合ができず目標も達成できなかったためにマイナスに働いた者もいた。その後、競技引退を迎える頃には、大会が中止になったことを受容し、競技生

活を振り返ることができるようになった。そうすると、大会の中止に安堵していた者も含め、各人が目標に挑戦し達成できなかったことから試合をして競技引退を迎えたかったという思いが表れた。また、先輩が競技引退をしていく姿に憧れを持っており、それをロールモデルとしていた。そして、大会の中止が分かった際や競技引退をする際には、大会の中止を予期していたり、競技引退後の生活のビジョンを持っていたりした者は、容易に移行に適應することができた。

今回の事例では、大会が中止したことによって、目標を達成する以前に挑戦することすらできなかった。その結果、Aさんは当初、試合と目標の喪失により競技に代わる対象を見出すことができず若干不適應傾向にあった。一方、Bさん、Cさん、Dさん、Eさんはコロナ禍という不可抗力により大会が中止になったことを受け入れるとともに、部活動に代わる対象が存在したことで、強かに現状に適應できた。本事例においては、競技に未練があり、競技に対する満足感が十分でなくても、競技に代わる対象があれば、引退後の生活に巧く適應することができていた。すなわち、図1を用いて説明するなら、スポーツ領域で不本意な脱社会化がなされたとしても、仕事領域や日常生活領域での社会化による「ショートカット型」の競技引退ができていたのである。

本事例において、引退試合は部活動をする上で明確な目標や区切りになったり、競技期の成果を明瞭化することができたりし、スムーズに競技引退を迎えるために必要であることが分かった。また、競技引退を予期できることは、引退試合とそのための準備期間が明確になり、この期間の練習の質を向上させ、納得のいく競技引退を迎えるための努力ができるので必要であることが分かった。

コロナ禍によって通常の活動ができなかった時であったからこそ、引退試合が大学運動部でスポーツの脱社会化の機能を果たしていることが顕在化したのである。また、こうした状況にあって、「楽しいから」引退後も練習に参加するDさんの姿に、亀山（2011）が指摘した超社会化における脱超社会化の困難さを垣間見ることができた。

## 註

- (1) 匿名性を担保するために、回答者が所属するX大学およびY大学について説明することは避けたいところではあるが、この両大学は専門性が高く、多くの学生が就職するために必要な所定の試験に合格することを最終的な目標としているので、競技引退後の生活への適應がし易かったという面もある。

## 文献

ベルクソン（1979）森口美都男 訳「道徳と宗教の二つの源泉」  
沢瀉久敬 編『世界の名著 64 ベルクソン』中公パックス。

- チクセントミハイ (2000) 『楽しみの社会学 (改題新装版)』新思索社.
- Coakley, J. J. (1983) Leaving competitive sport: Retirement or rebirth, *Quest*, 35:1-11.
- 大場ゆかり・徳永幹雄 (1999) アスリートの「競技引退イメージ」に関する考察 - 競技引退生起条件との関連性 -, 日本体育学会第50回記念大会, 349.
- 大場ゆかり・徳永幹雄 (2000) アスリートの競技引退に関する研究, 九州大学健康科学センター, 22: 47-58.
- 亀山佳明 (2011) 引退論序説 - 「降りること」の困難さについて, 稲垣恭子 編『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社, 168-195.
- 小丸超 (2010) スポーツ選手の引退に関する一考察 - 日本野球独立リーグの場合, *ソシオロジ*, 55 (2): 73-126.
- 川谷茂樹 (2013) 「練習」とは何か, 第6回 Y M F S スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティング「スポーツ討論会」配布資料: 1-7, <<https://www.ymfs.jp/project/assist/scmeeting/06/event/discussion/pdf/yscm6th-discussion.pdf>> (2021年4月25日参照).
- 豊田則成 (2011) 「アスリートのアイデンティティ形成とキャリア移行」, 杉原隆 編著『生涯スポーツの心理学 -生涯発達の視点からみたスポーツの世界-』, 福村出版, 163-173.
- 豊田則成・中込四郎 (1996) 運動選手の競技引退に関する研究: 自我同一性の再体制化をめぐる, *体育学研究*, 41 (3): 192-206.
- 豊田則成・中込四郎 (2000) 競技引退にもなつて体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討, *体育学研究*, 45 (3): 315-332.
- 中込四郎 (2000) スポーツ選手の競技引退に関する心理社会的的研究, 科研費報告書, <<https://tsukubarepo.nii.ac.jp/records/2>> (2021年4月25日参照).
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2019) 運動部における動機付け雰囲気と競技引退に対する態度の関係 - 中学生と大学生の特徴について -, 九州大学健康科学編集委員会, 41: 51-58.
- 永谷稔 (1998) 集団目標と個人目標が活動意欲に及ぼす影響について: 競技的スポーツ集団における目標による管理の視点から, *北海道女子大学短期大学部研究紀要*, 35: 105-113.
- 吉田毅 (1999) スポーツ選手の現役引退に関する社会学研究の視点, *九州体育・スポーツ研究*, 13 (1): 75-84.